

## 『滄溟先生尺牘』の時代

——古文辞派と漢文書簡——

高山 大毅

### 一. はじめに——流行の証言

江戸時代に盛んに読まれた初学者向けの漢文選集といえ、『古文真宝』や『文章軌範』、『唐宋八大家文鈔』の名が思い浮かぶであろう。だが、十八世紀、今日ほとんど忘れられている一冊の書物が、これらの本を上回る人気を集めていた。おそらく、『古文真宝』などが様々な文芸の領域に影響を与えたのと同じく、その書物を源とする水脈は江戸中期の文芸を縦横に走っていたに違いない。本稿は、その本流といくつかの支流とを辿り直す試みである。まずは、徂徠学派の文人のある逸話から、この流れに漕ぎ出すことにしたい。

服部南郭の弟子の石島筑波は、徂徠学派屈指の蕩児である。彼の講釈には次のような話が伝わる。

筑波、駒込にて舌耕したる時、書物はなし。唐詩選滄溟尺牘をば空にて説き、見台の上には浄留利本艸紙をのせて説きたり。又諸侯方に出講するに、大概書はいつも滄溟尺牘を見台に載せ空にて講ぜり。<sup>1</sup>

南郭門の才子ともなれば、記憶のみを頼りに『唐詩選』を講義してみせるぐらい訳もないだろう。しかし、『滄溟尺牘』もそうであったというのには、奇異の念を抱かないだろうか。

『滄溟先生尺牘』は陳所敬の編、古文辞派の領袖である李攀龍の書簡を集めたものである。日本では田中蘭陵の考訂で、享保十五年に嵩山房小林新兵衛から刊行された。巻頭の序文は服部南郭の手になる。宝暦元年には再刊され、延享三年には続編を名乗る大神景貫(校)『続滄溟先生尺牘』が出版されている。この本は、しばしば『唐詩選』と並称された。闇齋学派の稲葉黙齋は講説の席で苦々しげに語っている。

徂徠カ出タレハ日本モ文華ガ開ケタ杯云ハ片腹痛イコト。何文華カ開ケルコトゾ。《中略》マタモ古文(『古文真宝』——引用者注)三体詩ハ殊勝ラシキガ、ソレハマミテ世説唐詩選滄溟尺牘トクル。ヒトツ葉モ役ニ立タヌコトゾ。<sup>2)</sup>

この『世説新語』・『唐詩選』・『滄溟尺牘』とほぼ同じ組み合わせは、洪井太室の『読書会意』にも見える。太室はいう。「古以経立家。今以世説・蒙求・滄溟尺牘・于鱗唐詩選・明七才詩立家(古は経を以て家を立つ。今は世説・蒙求・滄溟尺牘・于鱗唐詩選・明七才詩を以て家を立つ<sup>3)</sup>)」。さらに、江村北海の言によれば、京に遊学している若者たちは、「その業をこふも、唐詩明詩李王が尺牘などの書を出す<sup>4)</sup>」というありさまであった。ここでいう「李王が尺牘」とは、李攀龍とその盟友の王世貞の尺牘を指している。王世貞の尺牘集である『弇州先生尺牘選』は寛保二年に出版されている。山縣周南の弟子の三浦瓶山も、「李王ノ尺牘」を読んだだけで、文章を分かった気になっている者を指弾している。

近頃李王ノ尺牘、盛二世二行ハレ、黄口ノ児輩、其一斑ヲ窺ヒ見テ、是ヲ文章ト心得、纔ニ二家ノ尺牘ヲ読テ李王ノ

文、カクノ如シト思ヘル者アリ。甚拍笑スベキノ事ナリ<sup>(5)</sup>

このような流行は地方にも及んでいた。

近き頃東都に一士あり。はじめの程は文章軌範を売講せしに、ここかしこに文章軌範の売講の人多くなりて利を得ること少きにより、珍らしく滄溟尺牘を講し出けり。本より新奇を好むの俗情に応じて大に世に行はる。惣して尺牘といふ吾日本にて近処隣家などことを通ずる手紙の類なり。今片田舎此あたりのものを見るに尺牘を真の文章なりと心得て少し素読にてもすれば滄溟尺牘を持たぬ者なきこそおかしけれ。<sup>(6)</sup>

これらの証言が示すように、『滄溟先生尺牘』が『古文真宝』や『文章軌範』に代わり、漢文入門書として扱われていた時代があったのである（以下、本稿では『滄溟先生尺牘』を『滄溟尺牘』と略称する）。

## 二. 流行の要因

### (一) 作文の捷徑

『滄溟尺牘』の流行にはいくつかの要因が考えられる。

第一に、短文の尺牘は比較的容易に書けるので、初学者の作文学習に向いているという見方があった。「書簡は作文の捷徑也、尺牘双鱼の類にて、入用の字をとり覚え、総体は欧蘇手簡を法とするがよし<sup>(7)</sup>」。おそらく往来物からの類推であろう。古文辞の書簡の見本は、『滄溟尺牘』ということになる。

文章ヲ学ブハ先ヅ尺牘ノ如キ易キモノヨリ入ルベシ。長崎の高彝（高階陽谷―引用者注）尺牘ハ滄溟ノ外ニ出テズト云ヘリ。モットモノ説ナリ。<sup>(8)</sup>

(二) 出版機構

第二の要因は、当時の出版機構にある。

荻生徂徠は『古文真宝』や『文章軌範』に代わる選集として『四家雋』を編纂した。<sup>(9)</sup>『四家雋』は、「達意」に秀でた韓愈・柳宗元の文と、「修辭」の模範たる李攀龍・王貞世の文を、文体別に配列した均整の取れた構成になっている。『滄溟尺牘』の地位は、本来この『四家雋』に占められるはずであった。しかし、享保五年に基本的な編集を終えた該書は、宝暦十一年まで刊行されなかった。徂徠が李王の文の内三十余編に評語を附していなかった事情があるとはいえ、その増補は南郭に遺囑されており、不審である。<sup>(10)</sup> 刊行が遅れた根本的な原因は、南郭の門人である望月三英の『鹿門隨筆』に見える。

徂徠先生韓柳李王の文を撰びて四家雋といふ、徂徠の作也。先年高山房に申付板行させんとする時に、韓柳の板本より突て公事となりて止申候。近年に成て板行に出たり、此書われら蔵本にもあるなり。<sup>(11)</sup>

『四家雋』は「韓柳の板本」から類板（類似出版）であると訴えられ、出版中止に追い込まれたのである。三英の言は本屋側の史料からも確かめられる。京都書林仲間の紛争記録の目次である『上組濟帳標目』に次のようにある。

韓柳選卜申書江戸須原屋新兵衛板行願被申二付、通り町中間より京都元板難儀二成候旨、達て御願被申候二付、相止候

処、又々当度古来在板之拔書類書卅七品之例書上ケ、再往願被申二付、通り町中ケ間御召被成、仲ケ間法義御尋被遊候  
二付一々返答有之候へ共、為念、京大坂之法義書付下シ申參候、則相談之上、相認メ下シ申候へハ其書付江戸表ニて御  
役所へ被差出候由二候 享保十一年八月也委細帳面ニ有<sup>13)</sup>

この須原屋小林新兵衛（嵩山房）が板行を願ひ出た「韓柳選」とは、『四家雋』前半の韓愈・柳宗元の卷（「韓柳雋」）を指すと見て間違いない。

かくして一度刊行が頓挫した『四家雋』は、宝暦十一年、素人蔵板（餐霞館蔵板）で出版される。『上組濟帳標目』の同年の項には「柳韓雋 蔵板之噂有之付、秋田屋平左衛門被申出候事」、「韓柳雋二付、秋田屋平左衛門より口上書被差出候に付、江戸表へ指下し候書状之事」とある。<sup>14)</sup>『唐柳河東集』と『唐韓昌黎集』の板元であった秋田屋平左衛門は『四家雋』の刊行を警戒していた。明和三年には、京都書林仲間が『四家雋』を「売止メ」（販売禁止）としている。<sup>15)</sup>ようやく『四家雋』が広く流通するようになるのは、安永六年に小林新兵衛・秋田屋平左衛門を含む三都書林の相合板（複数書肆の共同出版）で刊行されて以降のことである。既に徂徠が没してから五十年に近い歳月が流れていた。

これほどまで『四家雋』の出版が難航した背景には、上方の書肆（及びその江戸の出店）と江戸の新興書肆—小林新兵衛ら須原屋一統はその典型である—との対立がある。そして、その対立の根幹にあるのは、板株（出版権）の問題である。<sup>16)</sup>

板株の確立は海賊版の横行を防ぎ、出版業の安定的な発展に貢献した。しかし一方で、たとえば韓愈や柳宗元の文集のような古典的な著作であっても、板木を手放さない限りは最初にその本を出版した書肆に板株が帰属する仕組になっており、新規参入者には不利な制度であった。しかも、類板と認定されるものの範囲が広く、選集内の詩文や注釈書内の本文にも、当該作品の板株所有者は「差構」（出版権侵害）を訴えることが出来た。江戸中期以降、本文抜きや注釈書という読者に不便な書物が増えるのは、これが一因となっている。板株問題は、上方の老舗書肆と江戸の新興書肆の間の最大の火種であっ

た。

享保十一年八月の『四家雋』の紛議に先立ち、同年二月、京都の書肆の田原勘兵衛は、小林新兵衛刊の『唐詩選』を『唐詩訓解』の類板であると訴え、公事沙汰となっていた。<sup>17</sup>『四家雋』の一件は、東西の書肆の関係をさらに険悪にしたに違いない。これらの衝突が契機になったのであろう。享保十二年、須原屋一統を中核とする江戸の地店は、中通組を離脱し、新たな書物屋仲間の南組を作る。これによって江戸の書物問屋仲間のうち、通町組及び中通組は上方系列の本屋、南組は江戸の地店——という基本図式が出来上がる。両勢力の抗争は寛延三年に再燃している。<sup>18</sup>

以上のような東西の本屋の激しい紛争に巻き込まれ、『四家雋』の刊行は停滞した。徂徠学派の視点に立てば、『唐詩選』に関して小林新兵衛との提携が効果的であったことが、『四家雋』に関しては裏目に出たといえる。『唐詩選』の板株をめぐる田原勘兵衛と小林新兵衛との争いは、小林新兵衛が勝利し、『唐詩選』は『三体詩』や『瀛奎律髓』を圧倒していった。同じ過ちを文章選集において繰り返すことは、京都の書肆たちにとって絶対に避けねばならぬことであつたらう。彼らが『四家雋』の刊行に神経を失らせたのも頷ける。かくして、文章の刷新は徂徠の計画通りには行かなかつた。

もつとも、古文辞の文集は『四家雋』の李王の巻に限られていたわけではない。『滄溟先生集』や『弇州山人四部稿選』などの書もある。しかし、これらの本も類板規制に翻弄された。

『滄溟先生集』は、初め宇野明霞の訓点で出版が計画されたが、この企画は実現しなかつた。<sup>19</sup>その後、延享元年に、『補注李滄溟先生文選』が刊行される。<sup>20</sup>しかし、この本は六篇の文章の本文が削り取られている。他書との重複を避けたものと推測される。延享五年には関南瀨（校訂）『滄溟先生集』が上梓されるが、詩の巻のみである。<sup>21</sup>

『弇州山人四部稿選』は延享五年に芥川丹丘の校訂で刊行されている。<sup>21</sup>ただし、『上組済帳標目』延享三年に「丸屋市兵衛板行御願候二付、四大家文抄文範二差構、抜き被申相済則証文有之」とあるように、次に見る『四大家文抄』・『四先生文範』に載る文章を削除している。<sup>22</sup>

大潮（編）『四大家文抄』は元文三年の刊、四大家とは李夢陽・李攀龍・王世貞・汪道昆の四人を指す。本書は各種の文体を採録するものの、「碑」・「墓誌」などの文体には李攀龍と王世貞の文を採らず、物足りない選集である。また、徂徠の李夢陽と汪道昆への評価は高くないため、その点でも不満が残る編集となっている。<sup>(23)</sup>

寛保元年刊の焦竑（編）・大内熊耳（点）『四先生文範』は、『四大家文抄』と同じ四人の文章を収める。しかし本書は、施訓した大内熊耳自身も疑っているように焦竑の名を借りた偽撰の可能性が高い。それにも関わらず、熊耳が本書を刊行したのは、深刻な「明文」（明代の文章）不足への応急処置のためであった。<sup>(24)</sup>

以上のように、『四家雋』以外の本にはどれも欠点があり、古文辞の模範文集とするのは難しい。『四家雋』の刊行が遅れば、早くから刊行され、入手も容易な『滄溟尺牘』に人気が集まるのは当然の流れであった。

### （三）南郭の序文

流行の第三の要因は、巻頭に附された南郭の「重刻滄溟尺牘序」である。南郭は、この文章において先ず尺牘の歴史を次のように述べる。

尺牘は「古人」もこれを用いた。しかし、それは文章としての体裁は具えていても、微小なものであると見做されていた。そのため大事に関しては、「尺牘」を用いず、「書疏」の二文体を用い、長文を雄弁に代え、文采に心を砕いた。もし相手から尺牘が送られてきた場合には、返信はするが、それらを後世に残し、尺牘を「一不朽之具（一不朽の具）」になさうという考えはなかった。古の尺牘が今日まで伝わっているのは、作者が著名であったか、筆跡が優れていたかのどちらかによる。しかし、明代に至って変化が起こる。「明人始多用巧於此、作者維競。片玉必取諸崑岡、一枝必取諸桂林。斯可称創体矣。創体則滄溟其選也（明人始めて多く巧を此に用ひ、作者維れ競ふ。片玉必ずこれを崑岡に取り、一枝必ずこれを桂林に取る。斯れ創体と称すべし。創体は則ち滄溟 其れ選<sup>す</sup>れたり）」。明人は、尺牘に技巧を凝らし、その妙手を競い合

い、わずかな表現も古典に材を取った。これは事実上、新たな文体ジャンルの創始である。この新たな文体に取り組んだ人々の中で、李攀龍は最も優れている。

明代になって尺牘は本格的な文芸に生まれ変わったという南郭の説は非常に重要である。<sup>25</sup> 第四章で詳しく見るように、古文辞派の文人たちは尺牘を熱心に作ったが、彼らの多くは、このような認識のもと、他の文体同様の真剣さでその制作に取り組んでいたのである。

南郭は李攀龍の尺牘のもとづく所を四つ挙げる。この四つについて、南郭は「我思古人、実獲我心（我古人を思ひ、実に我が心を獲たり）」と述べており、それらは同時に南郭自身の尺牘観と一致している。

第一に、『春秋左氏伝』である。

夫敬於幣之未将、寓其实於赫蹏之間。非辞命以為潤色、何以嚴如端章甫見大賓。蓋取諸左氏。

夫れ幣の未だ将らざるに敬し、其の实を赫蹏の間に寓す。辞命以て潤色を為すに非ざれば、何を以てか嚴たること端章甫して大賓を見るが如くならん。蓋しこれを左氏に取る。

尺牘と「辞命」——すなわち外交の際に使者が語る言辞——とを結びつける論は、王世貞「尺牘清裁序」の「夫書者、辞命之流也（夫れ書は、辞命の流なり）」<sup>26</sup>を踏まえている。

また、「修辞」と「端章甫見大賓」といった礼の威儀とを類比的に捉える発想は、徂徠学に特徴的なものである。徂徠は「古之君子、礼楽得諸身。故修辞者、学君子之言也（古の君子、礼楽これを身に得たり。故に辞を修むるは、君子の言を学ぶなり）」<sup>27</sup>といったように、修辞と礼楽とを密接な関係にあると見る。南郭は徂徠の説を受け継ぎ、「夫礼楽皆得、謂之有



徳。有徳必有言。得之礼楽之旨。故辞約而旨微。得之礼楽之観、故言文而観美（夫れ礼楽皆得るを之を有徳と謂ふ。有徳は必ず言有り。之を礼楽の旨に得。故に辞約にして旨微なり。之を礼楽の観に得。故に言文にして観美なり）<sup>(28)</sup>という。南郭にとって、技巧を凝らした李攀龍の尺牘は、燦然たる礼楽を想起させるものなのである。

第二に、曹植と建安七子の劉楨である。

親交不薄、言期断金、蔚矣其文。概略其人、則鄴中之八斗、或助之才。蓋取諸曹劉。

親交不薄からず、言断金を期す。蔚たる其の文。其の人を概略すれば、則ち鄴中の八斗、或いは之が才を助く。蓋しこれを曹劉に取れり。

「親交不薄」は曹植の五言詩「贈丁儀」の「親交義不薄（親交、義薄からず）<sup>(29)</sup>」の句による。おそらく「曹劉」に限らず、建安期の詩文に描かれている友誼が南郭の念頭であろう。李攀龍の友人宛の書簡には、「握手」や「傍若無人」（友人と熱く語りあい、周囲を気にしない）<sup>(30)</sup>といった言葉が頻出する。このような友情の表現は建安文学に遡ると南郭は見るのである。南郭自身も平野金華らと「断金」の交わりを結んでいた。彼らは詩文の中で自らを建安七子になぞらえている<sup>(31)</sup>。

第三に、「二王」すなわち王羲之・王献之である。

知己其聴、何必繁音。小言詹詹若有若亡、則二王之唯墨是存。適足以効其真率。

知己 其れ聴かん。何ぞ繁音を必せん。小言詹詹、有るが若く亡きが若きは、則ち二王の唯だ墨のみ是れ存する<sup>マ</sup>。適に

以て其の真率を効ふに足る。

省略の多い王羲之の書簡は難解である。たとえば草書の典範とされる法帖「十七帖」には、数種の注釈が存在する。<sup>(32)</sup> 李攀龍の尺牘も同様であり、次章で取り上げる『滄溟尺牘』の注釈書は、難読箇所には二つの解釈を併記することも少なくない。

ここで南郭が「真率」というのは、王羲之が、「比者悠々、如何可言(比者悠々このころたり)。如何ぞ言ふ可けんや」——このころ心が晴れず、この気持ちをどう言い表せばよいだろうか——といったように自己の心境を繕わず述べていることをおそらく指している。李攀龍は、尺牘の中で好悪どちらの感情も、かなり明け透けに吐露する傾向があり、確かに「真率」である。<sup>(34)</sup>

第四に、『世説新語』である。

正始之旨、莫逆於彼此。雋永於短詞、俾人一唱而三嘆、則二劉之富清言、亦可以假之尺一之技。

正始の旨、彼此に莫逆す。短詞に雋永にして、人をして一唱して三嘆せしむるは、則ち二劉の清言に富むも、亦た以て之を尺一の技に仮す可し。

「正始之旨」は、何晏や王弼らの玄学を指し、「二劉」は『世説新語』の編者の劉義慶と注釈者の劉孝標とを指す。「清言」は、『世説新語』言語篇や文学篇の寸鉄人を刺す名言が念頭にあろう。『世説』には及ばないかもしれないが、『滄溟尺牘』にも警拔な表現は見える（たとえば「平生善臥。是称病隱。造化其奈我何（平生善く臥す。是れを病隱と称す。造化も其れ我を奈何せん）」<sup>(35)</sup>といった語）。南郭自身も『世説』風の機智に富んだ表現を好んだ。一例を挙げれば、「懷仙楼」での会合の欠席を告げる書簡に次のようにある。

不佞喬雖有忝屬仙籍、時乃不得廁三清之坐列、飽沆漑之餘酌。故応見嘖凡骨未化耳。<sup>(36)</sup>

不佞喬（南郭の名―引用者注）忝く仙籍に属する有りと雖も、時に乃ち三清の坐列に廁り、沆漑の餘酌に飽くことを得ず。故より応に凡骨の未だ化せざるを嘖はるべきのみ。

「懷仙樓」にちなみ、自分たちを「仙人」になぞらえているのである。

『滄溟尺牘』についての南郭の論には、彼の詩文一般に対する好尚が強く反映している。南郭の序を読み、『滄溟尺牘』を学べば古文辞の精髓を理解できると考えた読者は多かつたに違いない。

### 三. 注釈書

『唐詩選』の注釈書が多く編纂されたように、『滄溟尺牘』も多くの注釈書が編纂された。渋井太室は「関東之学（関東の学）」の特徴について語った中で、次のように述べる。

相伝曰、某精唐詩。某熟世説。某嫺于鱗尺牘。進聽其講説、退搜其訓註。童習白粉、以求一語之所出、与一字之所拠。有不得則不惜時日、不憚行露、必窮而止矣。以此成家。<sup>(37)</sup>

相伝へて曰く、「某は唐詩に精し。某は世説に熟す。某は于鱗尺牘（『滄溟尺牘』―引用者注）に嫺ふ」と。進みて其の

講説を聴き、退きて其の訓註を搜る。童習白粉、以て一語の出づる所と、一字の拠る所とを求む。得ざることを有れば則ち時日を惜しまず、行露を憚らず、必ず窮めて止む。此を以て家を成す。

このような講説と熱心な典拠探しの中から注釈書が生み出されていった。

これは「関東」に限られた現象ではなかった。既に紹介した江村北海の言にあったように、関西でも『尺牘』は流行していた。たとえば、『難波土産』の著者で、近松との関係で有名な大坂の儒者、穂積以貫は、『滄溟尺牘国字解』（写本<sup>38</sup>）を残している。伊藤東涯の門人である以貫も、時流に応じ、『滄溟尺牘』を講説の席で取り上げたのであろう。

最も早く公刊された注釈書も、関西の儒者の手になる。武田梅龍の『李滄溟尺牘便覧』（宝暦二年刊<sup>39</sup>）である。板元は山田三郎兵衛・河南四郎右衛門・上坂勘兵衛・中西卯兵衛ら京都の本屋である。『滄溟尺牘』の板元は小林新兵衛であるため、『便覧』は本文を有さず、注釈のみで構成されている。『便覧』の注釈のほとんどは典拠を引くのみであるが、「五斗」の注には徂徠の『度量衡考』の説を挙げ、「風塵」の注には、宇野明霞の考証を引用している<sup>41</sup>。梅龍は、徂徠学を上方に導入した宇野明霞に師事しており、彼の学統が表れた注釈といえよう。

続いて出版されたのは、村井中漸（関）・有馬玄蔵（著）『李滄溟尺牘国字解』（明和二年刊）である。村井中漸は、算学に秀でた京都の学者で、有馬玄蔵は彼の弟子である。「国字解」と銘打つ通り、その注釈はカナ交じり文で著されており、典拠を挙げるとともに、訳文に類した説明が随所に入る。『便覧』同様、注釈のみからなり、本文はない。板元は、『便覧』と同じであるが、『上組済帳標目』（宝暦十三年五月〜九月）に「同国字解、山田三郎兵衛、か、や卯兵衛、兩人相合之一件<sup>42</sup>」と見え、本屋間で採め事があった可能性がある。

明和五年には、『滄溟尺牘』の板元である小林新兵衛も注釈を刊行する。高橋道齋『滄溟先生尺牘考<sup>43</sup>』である。『便覧』の板元は本書の出版に危機感を抱いたらしく、明和六年に江戸の書物屋仲間<sup>44</sup>に本書に関して問い合わせている。『尺牘』本文

は無理でも、せめて注釈の利益を確保したいという思惑であろう。小林新兵衛はそのような意図をおそらく見抜き、わざと『考』を注釈のみの構成にしたのだと考えられる。そうすることで、『尺牘』自体の売り上げを維持しながら、注釈書の利益を奪取しようとしたのであろう。

著者の高橋道齋は、上毛下仁田の素封家で、井上蘭臺に師事した<sup>(45)</sup>。井上蘭臺は、林家員長を務めた後、備前岡山の池田家に仕えた儒者である。その学風は徂徠学に接近し、本稿の冒頭で紹介した石島筑波など徂徠学派の人士とも交際があった。また洒脱な人柄で、『唐詩笑』や『小説白藤伝』の戯著をものした。蘭臺の門下には、いわゆる折衷学の泰斗として知られる井上金峨や、書法における「復古」の主唱者であった澤田東江がいる。道齋は、金峨及び東江と莫逆の仲であった。蘭臺門周辺—とりわけ蘭臺と筑波の間の人脈—には、尺牘に深い関心を持った人物が多い、

先ずは井上金峨である。『金峨山人考槃堂漫録』には、『滄溟尺牘』中の「王舎城二頃種秫」という一節を考証した条がある。金峨は、その末に次のように述べる。

二十年前、講帷家奉李王二家集以詩書、謬以伝謬。近来此風少衰。可為後生賀之。可不謂純卿与有力焉哉<sup>(46)</sup>。

二十年前、講帷家李王二家の集を奉ずるに詩書を以てす、謬り以て謬りを伝ふ。近来此の風少しく衰ふ。後生の為に之を賀す可し。純卿与りて力有りと謂はざる可けんや。

かくいう金峨自身も、若い頃はこのような「風」に染まっていた。彼が徂徠学派の文人と交わり、古文辞に夢中になっていたことは、『病間長語』で「懺悔ばなし」として語られている<sup>(47)</sup>。また、彼の蘭臺に宛てた書簡は、典型的な李王風の尺牘である<sup>(48)</sup>。かつて親しんだ『滄溟尺牘』の語句は、反古文辞に転じた後にも、金峨の脳裏を去来していたのである。

次に鈴木澶洲である。『逢原記聞』によれば、澶洲はもとは浪人学者であったが、感応寺の富籤に当たり、旗本与力の株を買ったという。<sup>(49)</sup> 金峨は彼の著作に序文を寄せており、澤田東江とも交流があったと伝わる。彼の随筆『撈海一得』には、『滄溟尺牘』の難語（「致曆」・「于浙」・「投枚記里」）を論じた三条がある。<sup>(50)</sup> 「投枚記里」の考拠において彼は『中山伝信録』の一節を引き、同書の挿絵の「玻璃漏」（砂時計）と「針盤」（羅針盤）をあわせて掲載する。これと同じ『中山伝信録』の部分と「玻璃漏」の絵とが、道齋の『滄溟先生尺牘考』巻上附録にも載る。直接的な影響関係の有無は不明であるが、二人の関心の近さが窺われる。

高葛陂もこの列に加えて良いであろう。葛陂は、大坂の人。明末に日本に逃れた唐人の子孫という。江戸に出て、始めは篠崎東海の門に入り、東海が卒すると石島筑波に師事した。<sup>(52)</sup> 澤田東江と親しく、東江を介して金峨とも交際が開けている。<sup>(53)</sup> 明和年間以降は、京都に居を移し、その地では次章で取り上げる田中江南と交友している。彼には、『弇州先生尺牘選』の注釈『弇州尺牘国字解』<sup>(54)</sup>の著がある。跋によれば、越後滞在中にその地の弟子に与えたもので、尺牘流行の地方波及の一証となる。

これら一群の人士は、厳格な儒者なら眉をひそめる振る舞いが多かった。井上金峨は若い頃「客氣にまかせてさわぎ立ち」<sup>(55)</sup>、無頼の日々を過ごした。鈴木澶洲は「若キ時ハ放蕩ノ人」で、『吉原細見』を終生集めていたという。<sup>(56)</sup> 高葛陂は、十八大通の一人、「女郎買の稽古所」<sup>(57)</sup>と呼ばれた大和屋の文魚と交わった。<sup>(58)</sup>

彼らにとって『滄溟尺牘』は、文章だけでなく、文人生活の模範でもあったのであろう。「与宋子相」の次の場面などは、宴席での「意気慷慨」のよき見本である。

帰復雷雨。乃歌黄榆諸篇、以敵其勢、則響振大陸、秋色漂颯。頽乎就醉、遂極千載、品物五子於中原。

帰れば復た雷雨す。乃ち黄榆諸篇を歌ひ、以て其の勢に敵すれば、則ち響大陸に振ひ、秋色漂颯たり。頽乎として酔に就きて、遂に千載を極め、五子（王世貞ら五人の同志—引用者注）を中原に品物す。<sup>(59)</sup>

また、「夫玩世之為大於辟世也逸矣（夫れ世を遊ぶの大なりと為ること世を辟ることよりも逸かなり）」と李攀龍はいう。ここでの「玩世」は俗世を見下しながらあえて官途に就くことを指すが、江戸の文人はあえて時流に迎合し、俗世を楽しむことも「玩世」と呼んだ。<sup>(61)</sup> 自己の才知を認めぬ世の中へ不満を抱き（あるいはそのふりをし）ながら享樂的に生きるのは、隠棲よりも風流だと思った人々も少なくなかったであろう。

話を注釈書に戻すと、道齋の『尺牘考』が出た翌年、明和六年に新井白蛾『滄溟尺牘見訓』<sup>(62)</sup> が同じく嵩山房から刊行された。新井白蛾は易学者として知られ、徂徠学の影響を受け、「古易」を唱えた人物である。『国字解』が部分訳であったのに対し、『見訓』は、一部分節略はあるものの、ほぼ全訳である。本文は、『尺牘考』と同様掲載しない。

本書には、偽板と呼ぶべき本がある。北越山人『滄溟尺牘諺解』（明和四年刊<sup>(63)</sup>）である。両書の関係は複雑で、卷上・卷中はほぼ同内容であるが、卷下は大きく異なる。『上組濟帳標目』の宝暦十三年の項に、「滄溟尺牘見訓と申書 江戸須原屋新兵衛方板行催二付」<sup>(64)</sup>云々とあるところを見ると、『見訓』の企画はかなり早い時期から始まっていたようである。おそらく刊行に至る前に、『見訓』の卷下以外の原稿が流出するといった事件があったのではなからうか。庭川庄左衛門は「割印帳」に一度も名の見えない素性の怪しい本屋で、『唐詩選国字解』の偽板の一つ『唐詩選諺解』を出版している。<sup>(65)</sup> 『唐詩選』と『滄溟尺牘』はしばしば並称されたが、この二書は海賊版でも一対となっていたのである。

## 四 尺牘の制作

## (一) 指南書

『滄溟尺牘』の流行は尺牘の実作へと人々を駆り立てた。これを受け、尺牘制作の手引きとなる書物が和刻され、あるいは編纂された。

もつとも、この種の書籍は、『滄溟尺牘』流行以前から既に出版されている。王宇（撰）・陳瑞錫（注）『翰墨全書』（寛永二十年刊）や熊寅幾（編）『尺牘双魚』（承応三年刊）がその代表である。また、『尺牘諺解』（延宝八年刊）・『名公翰墨便蒙書』（延宝九年刊）のようにカナ交じり文の解説書も刊行されている。しかし、これらの本は点校者や撰者の名が不明であることが多い。これに対し、『滄溟尺牘』以後は、点校者や撰者の名が明示される。また、唐本の和刻であっても、新たに日本人の序を付すことが増える。尺牘に対する認識の変化がこのようなどころにも見て取れる。

尺牘作成の手引書は、その内容から数種に分かれる。仮に分類すれば、①尺牘で用いられる語彙や定型表現を集めた尺牘語集、②架空の文例を集めた文例集、③封書や宛名書の作法を記した作法書の四つに分けることができよう。今日の手紙の文例集がそうであるように、一書が二つ以上の内容を含めることもある。

まず、『滄溟尺牘』以後の日本の学者の手になる尺牘語集（①）を年代順に見ていくことにしたい。類似の内容でも構成や内容にそれぞれの編者の見識や工夫が見えて興味深い。

最も早い時期に出版された尺牘語集には、上柳四明『尺牘活套』（寛延二年刊）がある。四明は、木下順庵門の向井滄洲に師事した人物である。「発端」・「結尾」・「叙疎潤」といった項目別に見本となる語句を挙げる。ただし、本書の中には、李王の尺牘への言及が見られず、『滄溟尺牘』の流行とは関係のない可能性がある。

これに対し、宝暦五年に刊行された田中道齋『尺牘称謂辨』は明らかに『滄溟尺牘』を意識している。田中道齋（仲道



齋)は、若い頃から徂徠・春臺の学問を好み、無相文雄に師事した。<sup>66)</sup>

『尺牘称谓辨』は書名の通り、自他の呼称や進物・文房具の別称がその内容のほとんどを占める。道齋の編纂意図は、李王を真似して尺牘に難解な語をつらねる「童学」の風を改めることにあつた。<sup>67)</sup>しかし、その一方で彼は『弇州尺牘紀要』(宝暦六年刊)及び『滄溟尺牘辨疑』(未刊)を著している。このような李王の尺牘への複雑な態度は、これから取り上げる本の著者にも見られる。

明和六年には、大典頭常『尺牘式』が刊行される。本書の第一巻と第二巻は「尺牘語式」と題し、第三巻は「尺牘写式」と題す。「尺牘語式」は①に入り、「尺牘写式」は③に入る。大典頭常は、大潮元皓及び宇野明霞に就いて学んだ当代随一の文人僧であり、その学問は古文辞派の詩文研究の集大成といえる。広い学識に裏付けられた解説書の作成は、大典の得意とするところで、『尺牘式』にもそれは遺憾なく発揮されている。

「尺牘語式」の上巻は尺牘を構成要素に分かち(今の手紙でいうなら「頭語」・「時候の挨拶」・「安否の挨拶」といった要素に当たる)、それぞれの構成要素について語例を挙げる。下巻は「称呼」と頻用の表現の語例を補足する。説明は簡潔で要を得ており、本書に従って言葉を拾っていけば、機械的にある程度の尺牘は書ける。

「尺牘写式」は、便箋の用い方や封筒の様式など尺牘の体裁について解説する。冒頭に、『朱氏談綺』の朱舜水の説に基づき、高泉和尚や陳元賛、あるいは「近代華人華僧」の説を斟酌して編纂したとある。この種の本では、小宮山謙亭(昌世)の『発蒙書柬式』が宝暦五年に既に刊行されている。<sup>68)</sup>『発蒙書柬式』は、中国の書式のみならず、日本の古来の書式についても検討し、野宮定基や伊勢祐和に故実を質している。このように『発蒙書柬式』が考拠の書の色彩が強いのに対し、「尺牘写式」の内容は簡潔で、実用に特化している。

大典は、さらに天明四年に「語式」未収の語と「儀物雅称(シンモツノ名)」などを集めた『尺牘式補遺』を上梓している。

尺牘関係書の編纂に熱心だった文人に田中江南がいる。江南は徂徠学派の大内熊耳の門人で、古代中国の遊戯である投壺を復興し、普及させようとした人物である。<sup>(69)</sup>

江南の『書簡啓発』（安永九年刊）は、序に代えて「答列子榮」を載せ、漢文の横に同内容の候文を配する。本書の特徴は、漢文尺牘と候文書簡とを対比させることにある。その「答列子榮」で江南は、「舌講家挑標、售媿王李、控生徒、可則可也（舌講家 標を挑げて、媿を王李に售り、生徒を控く、可は則ち可なり）」<sup>(70)</sup>と述べた上で（ちなみに対応する候文には「講釈師共李王尺牘と看板掛入ヲ取も尤可宜候へ共」とある）、初学者がいきなり李王の尺牘を学ぶことの困難を説き、本書に集められた尺牘の「常語」<sup>(71)</sup>に先ず習熟すべきであるという。

このような主旨で編纂された『書簡啓発』は九部門にわたり、候文書簡の常套句とそれと同義の尺牘の「常語」を挙げると。たとえば「未御目見仕」の項には「未展望塵之拜（未だ望塵トオリガケの拜を展せず）」・「雖未挹龍光（未だ龍光オメ下サルを挹まざれども）」・「未奉謁（未だ謁を奉ぜず）」の三つが載る。<sup>(72)</sup>この例からも分かるように、適宜傍訓が附され、読者の理解を助けている。これは、陸九如（纂輯）・田中江南（訳）『新刻簡要達衷集時俗通用書柬』（安永五年刊、外題『尺牘簡要』<sup>(73)</sup>）にも共通した特徴である（該書は②の文例集に属す）。江南は、『六朝詩選俗訓』・『唐後詩絶句解国字解』の著があり、いずれも「俗言」の傍訓を施し、本文を「訳」している。彼はこの手法を尺牘手引書に対しても用いているのである。

江南は、これら以外にも尺牘関係の著作があったようで、『新刻簡要達衷集時俗通用書柬』の巻末には「江南先生編集尺牘類書」として、「尺牘簡要」・「尺牘啓発（前編 後編）」（『書簡啓発』）のほかに「尺牘綿裁」・「尺牘軌物」の書名が見える。

前章で紹介した鈴木澶洲は『尺牘筌』（天明二年刊）<sup>(74)</sup>を著している。本書は明人に加え、日本の学者の尺牘中の語も採録している。興味深いのは、「時令風雨類」などと並び「雑事語笑類」の項があることで、「舞掌絶倒（テヲウツテワラヒタヲレル）」や「関倒一路（ミチノサワギアルイタ）」<sup>(75)</sup>といった語が見える。この種の放埒な行動は、本書の読者に模倣されたに違いない。

天明四年には、岡崎廬門（閲）・岡崎鶴亭（輯）『尺牘断錦』<sup>(76)</sup>が刊行されている。岡崎廬門は、龍草廬の門人で初学者向けの解説書や詩語集を多く編纂している。岡崎鶴亭（元軌）は、廬門の子である。本書は、「函書（ハコニ入タ書簡）辱・之賜（王百谷）」<sup>(77)</sup>といったように、語・解説・用例の三つを具え、簡便ながら行き届いた編集がなされている。

天明七年に刊行された岡鳳鳴（閲）・山呉練（輯）『和漢尺牘解環』<sup>(78)</sup>は、尺牘類用の故事の原典を引き、続いて名家の尺牘中の用例を示す構成になっている。この本は、故事の自在な活用が尺牘執筆の上で不可欠であったことを端的に示している。

②中心の著作には、岡崎廬門『尺牘道標』（安永九年刊）<sup>(79)</sup>がある。この本の最大の特徴は、それぞれの文例に典拠の説明まで含む丁寧な訳解を付すことである。『翰墨全書』や『尺牘双魚』などの和刻本と比べると『尺牘道標』の分かり易さは際立っている。

一連の指南書の棹尾を飾るのは戸崎淡園『尺牘彙材』（寛政元年刊）<sup>(80)</sup>である。淡園は、水戸徳川家の分家筋である守山松平家の武士である。守山松平家は、三代松平頼寛（頃公、号は黄龍）以来、徂徠学を尊崇し、淡園もその学風を守った。歴代当主の信任が厚く、寛政十年には老中職に昇っている。前出の田中江南は守山松平家に一時期仕えていたので、淡園と江南とは親交があった。<sup>(81)</sup>

本書は五巻から成り、一巻と二巻は①の尺牘語集に属する。三巻は「布置」と題され、候文書簡と漢文尺牘の構成上の異同を示すため、同内容の候文と漢文を二十八組併載する（この部分は②に入る）。また末尾に「書柬箋式」を附し、簡略ではあるが③を載せる。四巻は「歴代名家尺牘」、五巻は「護園諸家尺牘」であり、小規模な尺牘選集となっている。

以上検討した多種多様な尺牘指南書は、主に十八世紀後半に出版された。この時期になると古文辞派も全盛を過ぎており、尺牘指南書にもその変化が見て取れる。前述したように、田中江南は李王の文章を尊崇しながらも、「常語」の習得を優先すべきであると説いていた。このような平明さへの配慮は、容易に反古文辞へと転化する。岡崎廬門は「尺牘道標自

序」で次のようにいう。

夫尺牘也、古之折簡而已。及至明人用巧于茲、採片玉一枝於崑山鄧林、唯啄彫維競。卒為一種之体也。逮于近世、彼厭常構奇好勝誇多之徒、亦頗倣之、有屹崛獠牙險澁而難通曉者。余謂若欲為童蒙則可採平易之文而教之。<sup>(82)</sup>

夫れ尺牘や、古の折簡のみ。明人に至るに及びて巧を茲に用ひ、片玉一枝を崑山鄧林に採り、唯だ啄彫をのみ維れ競ふ。卒に一種の体と為るなり。近世に逮びて、彼の常を厭ひ奇を構へ勝を好み多を誇るの徒も、亦た頗る之を倣ひ、屹崛獠牙險澁にして通曉し難き者有り。余謂らく若し童蒙の為にせんと欲せば則ち平易の文を採りて之を教ゆ可し。

この廬門の議論と大典の「歐蘇書簡序」の次の論をあわせて見ると、時代の趨勢が浮かび上がってくる。詩における宋詩再評価に対応する変化が、尺牘にも起こっているのである。

夫明文之郁々、工尺一者亦多。務在菁華、動失核実。妝飾之辞溢而宛転之致乏。所不取也。《中略》秦漢也、古文也、雖多亦奚以為。皆以其不求於切近故已。<sup>(83)</sup>

夫れ明文の郁々たる、尺一に工みなる者も亦た多し。務むるは菁華に在りて、動もすれば核実を失ふ。妝飾の辞溢れて宛転の致乏し。取らざる所なり。《中略》秦漢や、古文や、多しと雖も亦た奚を以て為さん。皆其の切近に求めざるを以ての故のみ。

明人の尺牘の裝飾過剰な傾向を補正するために、歐陽脩や蘇軾らの書簡を学ぶのも有益であると大典はいうのである。

(二) 尺牘集

指南書に加え、尺牘執筆の上で参考になるのは名家の実作である。

古文辞派の尺牘の総集は、顧起元(彙選)・李之藻(校釈)・三浦瓶山(考訂)『盛明七子尺牘註解』(延享四年刊)や、王世貞(編)・王世懋(校)『尺牘清裁』の明人の部が林東溟の校訂で出版されている。

興味深いのは別集である。

『滄溟尺牘』に続き、王穉登・王世貞・李夢陽・汪道昆・徐中行などの尺牘集が刊行されている<sup>(84)</sup>。彼らは広義の古文辞派に属する人物たちであるが、王世貞以外は、個人文集も個人選集も和刻されておらず、尺牘のみが出版されている。しかも、文集の尺牘の巻を切り出し、尺牘集として刊行したものが多い。王世貞の『弇州先生尺牘選』は沈一貫(編)『弇州山人四部稿選』の一部であり、李夢陽の『李空同尺牘』(延享五年刊)は序文で文集の全書刊行を謳っているが、結局尺牘以外の巻は上梓されていない。また、村瀬樸岡の校訂になる『明徐天目先生尺牘』(天明七年刊)は、樸岡の有する某氏秘蔵の文集の写本から、尺牘の部分を抄出し、注釈を施したものである。樸岡は、跋で「蓋自物夫子祖尚李王、而李王之文、昭昭乎掲日月而行也。尺牘亦各孤行。而至於天目之話言希見也(蓋し物夫子李王を祖尚してより、李王の文、昭昭乎として日月を掲げて行はるなり。尺牘も亦た各々孤行す。而して天目の話言に至りては見ることに希なり)」<sup>(85)</sup>という。李王の尺牘の盛行が念頭にあった彼は、稀覯の徐中行の文集の中でも、尺牘を真つ先に公刊すべきであると考えたのである。

反古文辞の人々も当初は尺牘を重視していた。尺牘という文体は、古文辞排撃のためにいち早く確保すべき橋頭堡と認識されていたからである。山本北山の門人たちは、古文辞批判の序を冠した『袁中郎先生尺牘』を安永十年に校訂出版している<sup>(86)</sup>。さらに、彼らは天明四年に、韓愈の書簡を集めた『韓文公書牘』を刊行している。

日本の文人騷客でも、文集とは別に尺牘集が上梓されている例がある。順を追ってみていくと、宝暦四年に、無隠道費の書簡を集めた『金龍尺牘』が刊行されている。<sup>(87)</sup> 無隠道費は、曹洞宗の僧で、大潮元皓と交流があった。道費は『心学典論』において徂徠学を論難しているが、<sup>(88)</sup> 詩文の好尚は徂徠学派と極めて近い。『金龍尺牘』は、一連の尺牘集の刊行を意識したものである。宝暦六年には、田中道齋『道齋先生尺牘』、宝暦七年には同『道齋先生承諭篇』が刊行される。<sup>(89)</sup> 道齋は李王の古文辞を否定するが、彼は尺牘を優先して出版するという発想の枠内にいたのである。宝暦十一年には、徂徠学派と関係の深い大潮元皓の『西溟大潮禅師魯齋尺牘』が出版されている。<sup>(90)</sup>

大典顕常は、自分の尺牘集を次々と世に送り出した。『小雲棲手簡』は何と四編にも及ぶ（初編安永六年刊、二編天明七年刊、三編寛政六年刊、四編寛政七刊）。『小雲棲手簡』で面白いのは、少々不謹慎と見えるような場面でも、大典が機智に富んだ表現を用いることである。たとえば、借りた本が見当たらない際には「未嘗出諸戸外、豈有翼而飛（未だ嘗てこれを戸外より出さず、豈に翼有りて飛ぶこと有らんや）」<sup>(91)</sup>と詫び、便箋が墨で汚れてしまうと、「林風一陣、毛生衝突楮生、塗抹白面（林風一陣、毛生〔筆の擬人化―引用者注〕楮生〔紙の擬人化―引用者注〕に衝突し、白面を塗抹す）」<sup>(92)</sup>と記す。おそらく当時は、凝った表現の背後に書き手の心づくしを読み取り、その才智を称嘆しながら、過失を笑って赦す―といった感覚があったのではなからうか（これは次章で見る漢文尺牘が可能にする親密な交際の問題と繋がる）。

日本人の尺牘集の出版は、寛政九年刊の龍草廬『艸廬尺牘』を最後に跡を絶つ。重野成齋は、「尺牘双魚約解叙」において次のようにいう。

我邦学漢文之士、攻東牘者、独護園之徒為然。而其餘多遺焉。豈謂無用於我歟、將為不足習歟。<sup>(93)</sup>

我邦 漢文を学ぶの士、東牘を攻むる者、独り護園の徒を然りと為す。而して其の餘は多く焉を遺す。豈に我に無用と

謂へるか、将た習ふに足らずと為すか。

尺牘の流行は古文辞派と消長をともしたのである。

## 五. おわりに

『滄溟尺牘』の流行は複数の要因が偶然的に重なり起こったものである。書簡を文章学習の導入と見る当時の通念と、出版業者内の対立、さらに南郭の力の入った序文の三つがたまたま組み合わせさせたことで、この流行は起こった。『滄溟尺牘』がこれほどまで読まれるようになるとは、徂徠学派の学者も書肆も、当初予想していなかったであろう。しかし、それによって尺牘の文体中の地位は上がり、尺牘の制作は盛んになった。つまり、特定の人物がある展望のもとで流行を仕掛け、主導したのではなく、予期せず起こった流行が文学の方向を規定したのである。

『滄溟尺牘』を入口に文章を学んだ読者は、交遊こそが文学の根幹であると考えたに違いない。尺牘を書くこと自体が交流を志向するのはいうまでもないが、古文辞の尺牘で頻用される表現（「吾党」・「握手」など）は、人々を交流へ強く誘う。また、第二章（三）で見たように南郭が「重刻滄溟尺牘序」で力説するのは、李攀龍の尺牘が「古人」の交遊に淵源することである。このような交遊へ傾斜した文学観は、十八世紀後半、各地で詩社が結成され、詩の唱和が盛んに行われたのとも対応している。

古文辞の尺牘を介した交際とは、およそ次のような類のものであった。

吾党・攘臂・扼腕・側目・睥睨など、明七子輩の詩文に多く用るとして、吾国の人もこれを用るは軽薄ぞ《中略》平生親

昵する友にてもなく、唯時節に宴会し、其席散じては、路人同然の交なるをも、吾党とい、書生仲間、師家の講席にて、面を見おぼへたるまでの輩まで、吾党々々といふこと、軽薄に<sup>94</sup>あらずや。

これは「軽薄」かもしれないが、古文辞の定型表現によって、親密な交流が形の上であっても実現しているともいえる。仮に内実が伴っていなかったとしても、形から入ることで、このような表現は実際の交遊を支援する力となったであろう。

さらに考えれば、内実の有無は副次的な問題といえるかもしれない。人は個々の友人関係の親疎をどれほど正確に把握できているであろうか。友情の一方通行や不均衡はしばしば発生する。かといって、親しさの度合や上下関係を逐一確認すれば、交際の心理的負担は増大する。ならば、いっそのこと、相互を親しい仲間と見なす、擬制が存在した方が、活発で、安定した交際が可能になるのではなからうか。古文辞派の詩文、とりわけ尺牘の修辭はこのような擬制の機能を果たしていたといえる。古文辞の尺牘を用いれば、「路人同然」の間柄でも、双方が過度な警戒心を抱くことなく、「吾党」の一員であるかのようにつきあうことができる。新たな交遊の可能性は広がり、文人社会の拡大は促進される。

古文辞派の好む典拠表現が、それを理解できるものの中に仲間意識を生み出すことについては別稿で論じた。<sup>95</sup>抒情性や個性といったものを基準に評価すれば、古文辞派の詩文は興趣に乏しいかもしれない。しかし、社交の媒体として見た場合は、放蕩無頼へ人を導きやすいといった欠点はあっても、それが優れていたことは確かである。とりわけ、交流の媒体も機会も今日より少なかった時代において、前述のような古文辞の尺牘の機能は非常に重要であったと考えられる。この点に関して、理論的な考察が十分になされないまま、漢文尺牘が衰退したことは、漢詩文を軸とする文人社会にとって大きな損失だったのではなからうか。おそらく、書画会の盛行や作詩人口の増大に見られる文人社会の繁栄は、文人社会の存続を自明視させ、その制度的な基盤に対する思考を妨げてしまったのであろう。

このような議論は、現代から振り返って過去に対し無理な要求をしているように見えるかもしれない。だが、遡って考え



れば、徂徠は当代の漢詩文の状況を緻密に分析した上で、新たな文学の世界を計画的に作り出そうとした。冗漫な文章に流れがちな日本人の傾向や、理屈ばった宋代の詩文が人々の心性に与える影響、それらを助長する『古文真宝』や『三体詩』などの書物—これらの一連の悪弊を克服するために、徂徠は『訳文筌蹄』や『四家雋』、『唐後詩』を編纂し、従来とは異なる詩文学習の階梯を示したのである。<sup>(96)</sup>この徂徠の企図は、人間や事物の傾向性や法則性を洞察した上で、「礼楽制度」を設計する徂徠学の「聖人」像を思わせる<sup>(97)</sup>（既に見たように、『四家雋』の刊行の遅滞によって、徂徠の計画は頓挫した）。徂徠の試みに倣い、古文辞の尺牘の問題点を視野に入れながら、その長所を生かした文学上の制度設計が再度試みられても不思議はなかった。尺牘指南書には、そのような関心の萌芽が見られる。だが結局、文苑の「聖人」は出現しなかった。「制作」の蹉跌と「聖人」の不在とを嘆くのは、徂徠学派風の陳腐な感慨であろう。しかし、失われた可能性は、このような感慨を抱くに足るほど大きかったのではないだろうか。

註

- (1) 『護園雜話』（『続日本随筆大成』第四卷、吉川弘文館、一九七九年）、七六頁。
- (2) 稲葉黙齋（講）・篠原惟秀等（筆録）『小学筆記』嘉言（東京大学総合図書館蔵）。
- (3) 渋井太室『読書会意』卷中、四十才（寛政六年刊）、〔長澤規矩也（編）』『影印日本随筆集成』第五輯、汲古書院、一九七八年）。大田南畝「寄古文辞」にも『滄溟尺牘』の名は見える（『寢惚先生文集』卷一、〔中野三敏・日野龍夫・揖斐高（校注）』『寢惚先生文集・狂歌才藏集・四方のあか』、新日本古典文学大系第八四卷、岩波書店、一九九三年）、二五頁。
- (4) 江村北海「藝苑談序」（清田儋叟『藝苑談』、明和五年刊）、〔池田四郎次郎（編）』『日本詩話叢書』第九卷、文会堂書店、一九二二年）。
- (5) 三浦瓶山「閑窓自適」、二十九才（安永五年刊）、〔長澤規矩也（編）』『影印日本随筆集成』第五輯）。
- (6) 塚田旭嶺「桜邑問語」卷二（長澤規矩也（編）『影印日本随筆集成』第四輯、汲古書院、一九七八年）、一九〇頁。
- (7) 梁田蛻巖『答問書』卷上（浜田四郎次郎・浜野知三郎・三村清三郎（編）『日本芸林叢書』第二卷、鳳出版、一九八二年復刊）、二〇頁。
- (8) 平賀中南『日新堂学範』卷下、十一ウ（安永八年刊）、〔長澤規矩也（編）』『江戸時代支那学入門書解題集成』第三集、汲古書院、一九七〇年）。
- (9) 荻生徂徠「四家雋例六則」（『徂徠集』卷十九、二十二才〔平石直昭（編集・解説）』『徂徠集 徂徠集拾遺』、近世儒家文集集成第三卷、

- ぺりかん社、一九八五)。
- (10) 平石直昭『荻生徂徠年譜考』(平凡社、一八八四年)、一二四頁。
- (11) 「評語」の未完と南郭への「遺囑」は宇佐美瀧水「刻四家雋序」、四ウ(『四家雋』、東京大学総合図書館蔵)に見える。評語の中途断絶自体が、『四家雋』の刊行中止に起因する可能性がある。晩年の徂徠は、残された時間を刊行が頓挫した『四家雋』より、他の著作に充てたのではなからうか。
- (12) 望月三英『鹿門隨筆』(国立国会図書館蔵)。
- (13) 『京都書林仲間上組濟帳標目』(彌吉光長『未刊史料による日本出版文化』第一巻、ゆまに書房、一九八八年)、二二一頁。
- (14) 同書、二七二、二七三頁。
- (15) 同書、二九〇頁。京都書林三組行司の『禁書目録』(明和八年刊)では、「素人板并他国板売買断有之部」に『四家雋』の名が見える(長澤規矩也・阿部隆一(編)『日本書目集成』第四巻、汲古書院、一九七九年)、十六ウ。
- (16) 板株に関しては、次の論考を参照。今田洋三『江戸の本屋さん』(NHKブックス二九九、日本放送出版協会、一九七七年)、市古夏生「近世における板株・類板の諸問題」(『江戸文学』第十六号、ぺりかん社、一九九六年)、柏崎順子「江戸出版業界の利権をめぐる争い―類板規制の是非」(『インテリジェンス』第三号、二〇世紀メディア研究所、二〇〇三年)。
- (17) 村上哲見『唐詩選』と嵩山房―江戸時代漢籍出版の「側面」(『日本中国学会創立五十年記念論文集』、汲古書院、一九九八年)、同「江戸の本屋・京の本屋」(『東方』第二二五号、東方書店、一九九八年)、有木大輔「江戸・嵩山房小林新兵衛による『唐詩訓解』排斥」(『中国文学論集』第三十六号、九州大学中国文学会、二〇〇七年)。
- (18) 今田洋三前掲書及び柏崎順子前掲論文に詳しい。
- (19) 日野龍夫『服部南郭伝攷』(ぺりかん社、一九九九年)、二二八頁。
- (20) 宋光廷(校閲)・宋祖駿・宋祖驊(補注)・山田蘿谷(点)『補注李滄溟先生文選』(延享元年刊、東京大学東洋文化研究所蔵)。
- (21) 沈一貫(編)・芥川丹丘(校)『兪州山人四部稿選』(延享五年刊、長澤規矩也(編)『和刻本漢籍文集』第一九輯、汲古書院、一九七九年)。
- (22) 『京都書林仲間上組濟帳標目』、二三四頁。
- (23) 荻生徂徠「四家雋例六則」(『徂徠集』巻十九、二十二才)。「徂徠集」載録のこの文は元文二年には読むことができた。
- (24) 『四先生文範』題尾、一オ―ウ(長澤規矩也(編)『和刻本漢籍文集』第十五輯、汲古書院、一九七八年)。
- (25) 同様の見解は、現代の研究にも見られる。陳鴻麒「晚明尺牘文學與尺牘小品」(國立暨南國際大學中國語文學系碩士論文、二〇〇六年)参照。
- (26) 王世貞「尺牘清裁序」(『兪州山人四部稿』巻六十四、十一ウ、明代論著叢刊、偉文圖書出版社有限公司)。
- (27) 「与平子彬」(第三書)、『徂徠集』巻二十二、十三才。

- (28) 「送江文伯」(『南郭先生文集』二編、卷六、十七ウ〔日野龍夫編集・解説『南郭先生文集』、近世儒家文集集成第七卷、一九八五年〕)。
- (29) 『文選』贈答一。
- (30) 「握手」は卷上十ウ、十五オ、十六ウ、卷中四ウ、十二オ、「傍若無人」は卷上十四ウ、十八オ、十九オ、卷中十一ウなどに見える。
- (31) 平野金華「詞賦相携坐暮天、滿堂賓客建安年(詞賦相携へて暮天に坐す、滿堂の賓客建安の年)」(『同藤東壁服子遷陪西臺侯冬日登樓二首』其一〔『金華稿刪』卷二、十三オ、享保十三年序、東京大学総合図書館蔵)。
- (32) 福原啓郎「王羲之の『十七帖』について」(『書論』第二十八号、書論研究会、一九九二年)。
- (33) 王羲之「積雪凝寒帖」(同書、一二二頁)。
- (34) 妻の葬儀について語った「与余德甫」(『滄溟尺牘』卷上)や出廬の後ろめたさを述べた「与劉希皋」(同書、卷中)が好例である。
- (35) 「与徐子与」(『滄溟尺牘』卷上、十七オ)。
- (36) 「報越雲夢」(『南郭先生文集』卷十、十六オ)。
- (37) 渋井太室「読書会意」卷中、三十八ウ。
- (38) 穂積以貫『滄溟尺牘国字解』(無窮会図書館蔵)。後に見る同名書とは異なる本である。本居宣長記念館所蔵の『滄溟尺牘聞書』も、関西での『滄溟尺牘』研究の遺産であろう。
- (39) 武田梅龍『李滄溟尺牘便覧』(宝暦二年刊、見返し題『滄溟尺牘解』、早稲田大学中央図書館蔵)。
- (40) 『李滄溟尺牘便覧』卷上、二オ。『度量衡考』量考、四十一ウ(川原秀城・池田末利(編)『荻生徂徠全集』第十三卷、みすず書房、一九八七年)。
- (41) 『李滄溟尺牘便覧』卷上、一ウ。ほぼ同内容の考拠は、宇野明霞(纂)『唐詩集註』卷二、三十一ウ(安永三年刊)にも見える。
- (42) 同書、二八二頁。
- (43) 高橋道齋(纂)『滄溟先生尺牘考』(明和五年刊、東北大学附属図書館蔵)。
- (44) 『京都書林仲間上組濟帳標目』、二九七頁。同様のことは、次に見える『滄溟尺牘見訓』出版の際にも行われている。同書、二八二頁。
- (45) 高橋道齋の伝記については、市河三陽『高橋道齋』(楽墨会、一九一八年)参照。井上蘭臺及び澤田東江については、中野三敏『近世新崎人伝』(岩波現代文庫、岩波書店、二〇〇四年)、同「沢田東江初稿」(一)～(三)。(一)は、暉峻康隆『近世文芸論叢』(中央公論社、一九七八年)所収、(二)は『近世文芸研究と評論』(第十四号、一九七八年)、(三)は『江戸時代文学誌』(第八号、一九九一年)。
- (46) 『金峨山人考槃堂漫録』卷十二(長澤規矩也(編)『日本随筆集成』第五輯)、三二八頁。
- (47) 井上金峨『病問長語』(岸上操編『近古文芸温知叢書』、博文館、一八九一年)、五～六頁。
- (48) 井上蘭臺「蘭臺」(第一書)〔『金峨先生焦餘稿』卷六(関儀一郎(編)『続続日本儒林叢書』第三冊、東洋図書館行会、一九三七年)、一四二頁〕。
- (49) 岡野逢原『逢原記聞』(多治比郁夫・中野三敏校注『当代江戸百化物 在津紀事 仮名世説』〔新日本古典文学大系第九七卷、岩波書店、

- 二〇〇〇年)、一六三〜一六四頁。
- (50) 鈴木澹洲『撈海一得』巻上、十八才〜二十一才(長澤規矩也(編)『影印日本随筆集成』第四輯)。
- (51) 『報劉都督』(『滄溟尺牘』巻上、八才)。
- (52) 松本節子「高葛陂著『漱石斎小艸録』」(『あけぼの』第三十巻六号、あけぼの社、一九九七年)。
- (53) 井上金峨『金峨山人考槃堂漫録』巻四(国立公文書館蔵)。田中江南との関係については高葛陂「刻六朝詩選序」(田中江南『六朝詩選俗訓』序、(長澤規矩也(編)『和刻本漢詩集成』総集第一輯、汲古書院、一九七八年)。
- (54) 高葛陂『弇州尺牘国字解』(明和七年刊、京都大学図書館蔵)
- (55) 井上金峨『病間長語』、五頁。
- (56) 岡野逢原『逢原記聞』、一六四頁。
- (57) 三升屋三三治『十八大通』(『続燕石十種』第二巻、一九八〇年、中央公論社)、三九七頁。
- (58) 三村竹清「葛陂山人」(『三村竹清集』第六巻、日本書誌学大系二三(六)、一九八四年)、二九〜三〇頁。
- (59) 「与宗子相」(『滄溟尺牘』巻上、十四ウ〜十五才)。
- (60) 「与余德甫」(第二書)(同書、巻上、十五ウ)。
- (61) 「好色」に溺れることを「玩世」と呼んだ例は次の文参照。千葉芸閣「好色論」(『芸閣先生文集』巻七、一才〜四ウ(富士川英郎(編)『詩集日本漢詩』第十五巻、汲古書院、一九八九年)。
- (62) 新井白蛾「滄溟尺牘見訓」(明和六年、東京大学総合図書館蔵)。
- (63) 北越山人「滄溟尺牘診解」(明和四年刊、(波多野太郎(編)『中国語学資料叢刊』尺牘篇第一巻、不二出版、一九八六年)。
- (64) 『京都書林仲間上組濟帳標目』、二八二頁。
- (65) 前掲村上哲見「唐詩選」と嵩山房―江戸時代漢籍出版の一側面―参照。
- (66) 田中道齊の伝記事項に関しては、竹治貞夫「近世阿波漢学史の研究統編」(風間書房、一九九七年)参照。
- (67) 田中道齊「尺牘称謂辨」二十才、二十二ウ(宝暦五年刊、都立中央図書館蔵)。
- (68) 小宮山謙亭(編輯)『発蒙書東式』(国立国会図書館蔵)。
- (69) 岡崎慶三郎「田中江南の墓碑発見と其事蹟に就て」(『掃苔』第九巻第四号、東京名墓顕彰会、一九四〇年)。
- (70) 田中江南『書簡啓発』(安永九年刊)、三才。
- (71) 同書、三ウ。
- (72) 同書、十才、傍訓は原書では左訓である。
- (73) 陸九如(纂輯)・田中江南(訳)『新刻簡要達衷時俗通用書柬』(安永五年刊、(波多野太郎(編)『中国語学資料叢刊』尺牘篇第一巻)。
- (74) 鈴木澹洲(纂)『尺牘筌』(天明二年刊、(波多野太郎(編)『中国語学資料叢刊』尺牘篇第一巻)。

- (75) 同書、三十一ウ。括弧内は左訓。
- (76) 岡崎廬門(閔)・岡崎鶴亭(輯)『尺牘断錦』(龍谷大学図書館蔵)。
- (77) 同書、一オ。□内は細注。
- (78) 岡鳳鳴(閔)・山呉練(輯)『和漢尺牘解環』(天明七年刊、東北大学附属図書館蔵)。
- (79) 岡崎廬門(著)『尺牘道標』(安永九年刊、東北大学附属図書館蔵)。
- (80) 文政元年には『翰墨蒙訓尺牘笥』、文政七年には市原青霞『消息文鑑尺牘楷梯』が刊行されているが、これは『翰墨蒙訓』(貞享五年刊)を一部改変したものである。
- (81) 司馬光(更定)・田中江南(補正)『投壺新格』跋(明和六年刊、東京大学総合図書館蔵)。
- (82) 岡崎廬門『尺牘道標自序』(『尺牘道標』卷一、二ウ〜三オ)。
- (83) 大典頭常「欧蘇書簡序」(『北禅遊草』卷一、六オ〜六ウ、寛政四年刊、東京大学総合図書館蔵)。
- (84) 王穉登(撰)・田中蘭陵(刪定)『謀野集刪』(享保二十年刊)、王世貞『弇州先生尺牘選』(寛保二年)、李夢陽『李空同尺牘』(延享五年〔長澤規矩也(編)『和刻本漢籍文集』第十四輯、汲古書院、一九七八年〕、汪道昆・皆川淇園(輯注)『汪南溟尺牘』(宝暦四年、早稲田大学中央図書館蔵)、村瀬樸岡(校)『明徐天目尺牘』(天明七年刊、〔長澤規矩也(編)『和刻本漢籍文集』第十五輯、汲古書院、一九七八年〕)、『明和九年刊書籍目録』には、後七子の宋臣の「宋子相尺牘」の名も見える(慶応義塾大学附属研究所斯道文庫(編)『江戸時代書林出版書籍目録集成(三)』、斯道文庫書誌叢刊之一、井上書房、一九六三年)。
- (85) 村瀬樸岡(校)『明徐天目尺牘』、二十二ウ。樸岡には「南郭先生尺牘標注」(寛政七年刊)の著もある。
- (86) 宮川崑山・鳥居九江(編)、山本北臯(校)『袁中郎先生尺牘』(安永十年刊、〔長澤規矩也(編)『和刻本漢籍文集』第十五輯〕)。
- (87) 無隱道費『金龍尺牘』(宝暦四年刊、国立国会図書館蔵)。無隱道費の伝記については小川靈道「無隱道費伝の一考察」(『駒沢史学』第四卷、駒澤大学、一九五四年)。
- (88) 無隱道費『心学典論』卷三、外魔(寛延四年刊、東京大学史料編纂所蔵)。
- (89) 田中道齋『道齋先生尺牘』(宝暦六年刊)、同『道齋先生承諭篇』(宝暦七年刊、龍谷大学図書館蔵)。
- (90) 大潮元皓『西溟大潮禅師魯寮尺牘』(宝暦十一年刊、国立国会図書館蔵)。
- (91) 大典頭常『小雲棲手簡』初編、卷上、八オ(国立国会図書館蔵)。
- (92) 同書、初編、卷下、二ウ。
- (93) 重野成齋『成齋文集』第二集第二卷(富山房、一九一一年、国立国会図書館蔵)、五十六オ。
- (94) 清田儋叟『藝苑談』、三〜五頁。
- (95) 高山大毅「人情」理解と「断章取義」——徂徠学の文芸論——(『国語国文』第七八卷八号、京都大学国語国文学会、二〇〇九年)、同「説得は有効か—近世日本思想の一潮流」(『政治思想学会(編)『政治思想研究』第十号、風行社、二〇一〇年)。

(96) 「訳文筌蹄題言十則」(『徂徠集』卷十九)、「題唐後詩総論後」(同書、同卷)、「四家雋例六則」(同書、同卷)。

(97) 荻生徂徠『辨名』聖1、理1(吉川幸次郎・丸山眞男・西田太一郎・辻達也校注『荻生徂徠』、日本思想大系第三十六卷、岩波書店、一九七三年)、二二六―二二七、二四四―二四五頁。同『太平策』、同書、四六〇頁。この連想は奇抜ではない。徂徠の弟子の鷹見爽鳩は、選集編纂と礼楽制作を類比的に捉えている。「先王之教礼楽以陶鑄焉。習以成性《中略》博与才豈可教哉。乃教之自生也。于以知二李之選功侔礼楽焉(先王之教礼楽以て陶鑄す。習ひて以て性を成す《中略》博と才と豈に教ふ可けんや。乃ち教の自づから生ずるなり。于を以て知んぬ二李の選は功礼楽に侔しきことを)」、(夫二李之選選乎雋。其功侔礼楽(夫れ二李の選雋に選べり。其の功礼楽に侔し)。(鷹見爽鳩「詩筌序」二オ、三オ(同『詩筌』、享保七年刊、東京大学総合図書館蔵)。「二李之選」は李攀龍(『唐詩選』)と誰を指すのか不明である。『詩筌』凡例には「高李之選」という語が見える。李夢陽と高棟(『唐詩品彙』の編者)を混同したものでか。

\*注を附した江戸期の板本で所蔵を示していないものは、家蔵本を用いた。本稿は、日本中国学会第六十二回大会(二〇一〇年一〇月)及び専修大学での日本思想研究会(同年同月)で行った報告を大幅に補訂したものである。二つの機会に受けた質問及び教示に深く感謝したい。